



▲土砂を運ぶトロッコ線が走る河川敷（昭和27年）。奥には京阪本線の鉄橋が。手前の橋は翌年コンクリート製に改修され、「天津橋」と名付けられました。



▲今の天津橋付近。橋は平成4年に架け替えられた2代目です。



▲林さんが交野の郡津付近で撮影した堤防沿いの道（昭和32年）。右手が釈尊寺周辺。枚方市内から田園風景が続いていました。

平安歌人が「七夕伝説」になぞらえた

天野川

水源の生駒山地から、枚方市域を横断して淀川へと流れ込む天野川。名前の由来ははっきりしませんが、平安時代の歌人・在原業平が枚方を訪れた際、川の名前を七夕伝説になぞらえ「狩り暮らし たなばたつめに宿借らむ 天の河原に我は来にけり（狩をしていたら日が暮れてしまった。今夜は織姫様に宿を借りよう。私は天の川に来たのだから）」と詠んでいます。古今和歌集や伊勢物語でこの句を知った平安貴族は、七夕伝説に想いをはせていたかもしれません。

「堤防沿いの道路は未舗装で、その周囲は延々と田んぼが続いていました」と話すのは、昭和27年から約40年間市内で教師をしていた林和明さん（81歳）。昭和32年秋、顧問として第一中学校のワンダーフォーゲル部を引率し、自転車に乗って川沿いに交野の磐船までさかのぼったことを懐かしそうに振り返ります。「自転車にまだ市税がかかっている時代のことです。車も通らないのどかな中をゆつくりと進みましたよ」。田園が広がっていた風景は、開発が進み変貌を遂げました。昭和30年代頃までは工事に伴う土砂をトロッコで運ぶ光景が各地で見られ、天野川にも田宮辺りから淀川との合流地点まで、河川敷に沿って線路が敷かれていました。現在の河川敷には遊歩道が整備され、毎年7月には天津橋付近で地元商店街が中心となり「七夕まつり」が開かれるなど、天野川は今も市民に愛され続けています。

（平成23年7月号）